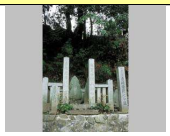
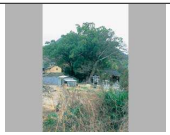
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	春風館頼家住宅　※頼は旧字 主屋（附　幣串2本）　1棟 長屋門　1棟 裏座敷（附　裏座敷建築諸筆記1冊）　1棟 納戸蔵（附　棟札1枚，幣串1本，納戸蔵并隣屋諸請控1冊）　1棟 米蔵（附幣串1本）　1棟 附　土塀　4棟 臼場　1棟	しゅんぷうかんらいけじゅうたく	5棟	竹原市竹原町	昭62.3.30（県指定） 昭63.12.19	主屋／木造，切妻造，本瓦及び桟瓦葺		春風館頼家住宅と復古館頼家住宅は江戸時代末期から明治時代の住宅で，竹原市竹原地区重要伝統的建造物群保存地区内にある。 春風館は，頼山陽の叔父で広島藩の儒医であった頼春風の居宅として建てられた。現在の主屋は安政2年（1855）に再建されたものである。屋敷構えは道路に面して長屋門を建て，その奥に主屋を配していて，武家屋敷に似ている。主屋の背後には裏座敷，納戸蔵，米蔵などの附属屋をもち，主屋の座敷の前後には飛石や手水鉢を配した庭をつくるなど，規模の大きな上層の町屋の特徴をよく示している。		
国	重要文化財（建造物）	復古館頼家住宅　※頼は旧字 主屋（附幣串1本）　1棟 表屋及び玄関（附棟札1枚，幣串1本，酒場改築普請帖1冊）　1棟 米蔵（附幣串1本）　1棟 臼場（附幣串1本）　1棟 附　土塀　3棟	ふっこかんらいけじゅうたく	4棟	竹原市竹原町	昭62.3.30（県指定） 昭63.12.19	主屋／二階建，切妻造，桟瓦葺，塗屋造		復古館は，春風館の西隣にある。江戸時代後期の文人，頼春風の孫の三郎が分家独立して現在の屋敷を構え，酒造業や製塩業を営んだ。 主屋は安政6年（1859）の建築である。春風館と異なり，道路に面して表屋（店舗），その奥に主屋を配し，両者を玄関で接続する，いわゆる表屋造で，大きな商家にみられる形式によっている。主屋，表屋の西側や背後に臼湯，米蔵などの附属物が建つが，酒蔵などの一部は現在なくなっている。主屋の座敷の前後に庭園をつくっている。復古館は建物の質がよく，家業を反映して表屋造となっており，武家屋敷風の構えの春風館と好対照をなしている。		
国	重要文化財（工芸品）	銅鐘　峻豊四年ノ銘アリ	どうしょう	1口	竹原市竹原町上市	明43.4.20		高さ47cm，口径41cm	峻豊4年（963）高麗（こうらい）の光宗の時代に作られた朝鮮製の鐘である。小早川隆景が朝鮮侵略の際に持ち帰り，幼時の学問所であった照蓮寺に寄進したという。		
国	重要伝統的建造物群保存地区	竹原市竹原地区伝統的建造物群保存地区	たけはらしたけはらちくでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく		竹原市竹原町	【選定年月日】昭57.12.16		約5.0ha	竹原市竹原地区伝統的建造物群保存地区は，竹原の中心の本町（ほんまち）通りに沿った町筋で，江戸時代初期（17世紀前半）に形成された町である。通りに沿う建物は，二階建て，切妻造，瓦葺の塗屋造りの町家で，大半が江戸時代中期（17世紀後半～18世紀前半）から明治時代に建てられている。妻入りと平入りが混在し，また街角には入母屋造の建物があって，町並みに変化を与えている。町家の正面意匠も出格子（でごうし）・平格子，あるいは千本格子と多様であるが，格子の連続する町並みは落ち着いた中にも華やかさをもつ統一したたたずまいを見せる。大規模な家では広い庭をつくり，奥座敷や茶室を設け，竹原の町人文化の様子が窺い知られる。この地区は塩業を基盤として発展した町で質の高い町家が連続し，町並全体の意匠もすぐれ，瀬戸内海沿岸の伝統的な町家群の好例である。		
国	天然記念物	スナメリクジラ廻游海面	すなめりくじらかいゆうかいめん		竹原市竹原町阿波島南端白鼻岩を中心とする半径1,500mの円内海面	昭5.11.19			スナメリクジラは，イルカの一種で，体長は1.5mくらいで，くちばしは丸く，背びれがない。インド洋，太平洋，東シナ海に分布している。瀬戸内海では例年1月下旬頃，竹原市阿波（あわ）島の近海に現われ，繁殖した後，5月頃に離散する。		関連施設：宮島水族館（0829-44-2010）
国	天然記念物	忠海八幡神社社叢	ただのうみはちまんじんじゃしゃそう		竹原市忠海町字鳥居町	昭11.9.3			モッコクは，アジアの暖地固有の常緑広葉樹である。この神社の境内には総数約60本を数えるモッコクが群生し，そのうち目通り幹囲1.20mを越えるものが10本以上もある。いずれも樹勢は旺盛で樹高20m～30mに達し，群落生態学上一つの単位として貴重なモッコクの群叢を形成する。ちなみに最大のものは目通り幹囲1.90mで，モッコクでは県内有数の巨樹である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	竹原市竹原町	昭37.3.29	寄木造，玉眼	像高85cm，光背高さ94cm	西方寺（さいほうじ）は小早川隆景の創建と伝えられ，京都の清水寺を模して造ったという普明閣に本像は安置されている。玉眼入りで，刀法は蚊（か）複雑な衣文の構成には宋朝風の影響が見られる。右足のほぞに「法印性国」と，左足のほぞに「同四天作」の墨書銘があるが，紀年がないのは惜しまれる。宝相華（ほっそうげ）唐草文様を透（すかし）彫にした金銅製舟形（ふながた）光背も仏像と一具で，室町時代（1333～1572）の作と考えられる。		
県	重要文化財（彫刻）	木造聖観音菩薩坐像	もくぞうしょうかんのんぼさつざぞう	1躯	竹原市吉名町	昭53.1.31	一木造	像高93.5cm，膝張72cm	この菩薩像の所在する場所を観音谷と称しており，『芸藩通志』によると古くは大寺であった廃長福寺跡の観音堂に安置されている。法衣を通肩（つうけん）にかけ結跏趺坐（けっかふざ）の姿勢のこの菩薩像は，頭部及び胴体を一木で造り，膝張部のみを寄木にしている。宝髪を高く結い，そのはえぎわには冠座の痕が見られるが，冠は欠失している。眼は木彫で，口紅・口髭とも当初のまま残っている。法衣衣文の彫法は浅く全体に薄着に見えるが，これは像の木地の上に布をはり付けた痕を残しており，その上に漆を塗る乾漆の手法によったためと思われ，現在も黒漆の上に置いた当初の金箔をよく残している。当初の姿をよく伝える平安時代後期（12世紀）の作である。		
県	史跡	磯宮	いそのみや		竹原市竹原町字白島	昭12.5.28			建久5年（1194）宇佐から勧請（かんじょう）したといわれる八幡神社である。 唐崎常陸介（からさきひたちのすけ）はここの神官であり，境内の千引岩に宋の文天祥（ぶんてんしょう）の書を模して，忠孝の二大字を刻した。江戸幕府の威権の盛んな時に尊王思想を明示したものとして注目される。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	唐崎常陸介之墓	からさきひたちのすけのはか		竹原市竹原町地蔵町字北屋敷	昭17.6.9			唐崎常陸介（1737～1796），名は士愛，号は赤斎という。磯宮八幡（いそのみやはちまん）の神官であり，谷川士清（たにがわことすが）に学んだ。宝暦・明和（1751～1772）のころ，尊王論者として京都・九州の同士の間を往復した高山彦九郎（たかやまひこくろう）と提携して国事に奔走する。寛政8年（1796），60歳のときに自殺した。		
県	史跡	頼惟清旧宅 ※頼は旧字	らいこれすがきゅうたく		竹原市竹原町字本町北	昭32.9.30	母屋／重層屋根入母屋造，本瓦葺，塗りごめ造 離れ座敷／単層屋根切妻造，本瓦葺，塗りごめ造		惟清（これすが）は名を又十郎といい，文運の盛んな竹原の町に紺屋を営んでいた。和歌をよく詠じ，天明3年（1783）77歳で没した。その子春水（山陽の父）・杏坪（きょうへい）は，共に学者として名高く広島藩の儒官となった。また二男の春風は竹原の家を継ぎ，医業をこととした。今日，竹原の旧宅は，頼家発祥の地として旧状を保っている。旧宅は，重層屋根，入母屋造，本瓦葺の主屋と，南に接する単層屋根，切妻造，本瓦葺の離れ座敷からなっており，双方とも塗籠造（ぬりごめづくり）である。主屋の道路側八畳の間が紺屋の店であったものと思われる。		
県	史跡	木村城跡	きむらじょうあと		竹原市新庄町	昭48.3.28			木村城跡は，竹原小早川氏が本拠とした山城跡である。小早川氏は，鎌倉時代の初め（13世紀前半）沼田庄の地頭職をえて相模国の本拠から西遷し，承久3年（1221）に起こった承久の変の後に，竹原小早川家が創設され，正嘉2年（1258），茂平の次子政景が都宇・竹原庄に分立した。さらに応仁の乱（1467～77）後は惣領家をしのぐ勢力となり，13代隆景のとき沼田本家を相続し，本拠を沼田高山城に移した。 城跡は，本丸，二の丸，三の丸など12以上の郭からなり，井戸，土塁跡なども残っている。北側は，末宗川，西側は賀茂川に狭まれた天然の要害となっている。		
県	天然記念物	忠海のウバメガシ樹叢	ただのうみのうばめがしじゅそう		竹原市忠海町宇宮床	昭12.5.28			本樹叢は，社殿の北西部から背後にかけて生育している6株のウバメガシからなり，順に目通り幹囲1.84m，1.74m，1.44m，1.37m，1.30m及び1.10mである。本樹叢はその生育状態から一見，植栽されたもののようにみえるが，自然生の名残であると考えられる。北方の丘の斜面に発達しているクロマツ林は群落調査の結果，クロマツ―ウバメガシ群落の組成を示しており，また，西側の山裾ではクロマツとウバメガシとが崖地に生育している。これからも，クロマツ―ウバメガシ群落はこの地の代表的林相で，本樹叢が天然のものであることを証明している。		
県	天然記念物	楠神社のクスノキ	くすのきじんじゃのくすのき		竹原市忠海町字明神原	平4.10.29			楠神社のクスノキは，社殿の背後（北）にあり，地面に浮き出た，周囲約21m根張りを土台にして主幹が生じ，地上4m辺りで4本の支幹に分かれ樹高は約32mを測る。 クスノキは関東地方以西の低地に生ずる常緑広葉樹で，特に太平洋及び瀬戸内海の沿岸地域に巨樹が多い。済州島，台湾，中国南部，インドシナにも分布する。昔から聖木として神社の境内に植えられることが多く，本神社ではクスノキが御神体のような形になって社殿の背後に立ち，主幹には注連縄が張られている。		
県	無形民俗文化財	福田のししまい	ふくだのししまい		竹原市福田町	昭56.4.17			獅子はライオンをかたどったもので，その力によって邪霊悪魔をしりぞけるものと考えられた。もと中近東に発生したと伝えられるが，インド，中国に伝わるうち，いよいよその威力を定着させ，日本にはいって邪神，仏敵を滅ぼすものとして，社寺に用いられた。 福田の獅子舞の発祥については諸説があるが，江戸時代の中ごろ（18世紀），当地の漁民が幸崎の漁民とともに，四国の伊予地方で舞われていた一匹舞の獅子舞を習い覚えて帰ったのが最初であると言われる。しかし幸崎では獅子をなくして囃子だけを残しているのに対し，福田では獅子も囃子も今に伝えているところに，価値があると思う。		
県	無形民俗文化財	忠海の祇園祭みこし行事	ただのうみのぎおんまつりみこしぎょうじ		竹原市忠海町	昭59.11.19			祭礼行事の中心となるのがみこしで，奥守（こしもり）二十歳になった青年が選ばれる。地元では「こすさん」という。）にひかれて町内を練り歩く際，新町，浜町，内堀，栄町など特定の場所で，みこしの「祇園まわし」が行われる。「祇園まわし」は，奥守たちが宰領の采配によって舁（か）く位置を目まぐるしく変え，みこしを上下左右に動かすもので，みこしは横になったり縦に立ち上がったりする。これは御祭神に退治された八岐大蛇を模したものという。「祇園まわし」は，広い道路はそれほどでもないが，狭い小路では屋根すれすれにまわされるが，そのまわし方は珍しくまた巧妙で，勇壮な夏祭にふさわしい。 神社の祭礼にみこしが出る所は県内に多数あるが，忠海町の祇園社のみこしのように勇壮な動きをするものは珍しい。何よりも町内全体が祭礼に参加し，その祭礼行事の主なものが古い記録のとおりに行われている点は，評価されてよい。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧日の丸写真館	きゅうひのまるしゃしんかん	1棟	竹原市本町	H26.12.19			竹原市竹原伝建地区の南西，本川左岸の道路沿い角地に所在する台形敷地一杯に建ち， 西角を隅切（すみきり）とした平面で，三階は北角も斜めにする。二階に写真修整室，三階に写場と現像室を設ける。昭和7年頃に建築された後，昭和20年頃に改修されているものの，全体のかたちや開口部配置は当初を保持しており，特異な景観を創出している。		